

トに覆われ佇んでいる。その光景も「風景に馴染んだもの」だという。「放射能と折り合いを付けるしかない。妥協して、受忍する。帰れる人は高齢者か復興が仕事」の役場の人。町民はもうよそに根付き、そこで生きようと必死なんだよ。だから役場の復興の話と現実にもすごい乖離がある」。

放射線という目に見えないものだからこそ、吉沢さんにとって彼自身と牛が生きてきた事実が重要なのだろう。「原発事故後、みんないろいろ考えたと思うが、それもいずれ風化して忘れちゃうんだ。この牧場は、原発時代への逆戻りに対し、原発事故当時の状態をそっくり残して、メモリアルとして伝える場所なんだよ。邪魔者の被ばくした牛が生きる場所なんだ」

赤字覚悟 誰かが始めないと

同じく浪江町で3月1日、新しい飲食店がオープンした。「なみえ肉食堂」。エゴマの種を飼料にまぜた「エゴマ豚」を取り扱う。経営する渡辺貞雄さん(58歳)は開店初日から「商売としては捉えられないです。赤字は言うまでもないでしょう」と話した。

開業日、訪れた客のほとんどが建設や復興関係で浪江町に来ている町外出身者だった。一方、地元住民はほんの1割程度だったという。

渡辺さんはこの店のほかに福島市中



なみえ肉食堂の渡辺さん(一番右)。「赤字でしょうね」と笑う。



上:入り口に「空室」と張られた部屋が並ぶ高久第9仮設住宅。下:退去を迫られる松本義道さん(左)と妻の良子さん。

別の飲食店や精肉店を複数経営している。そこで客として来ていた浪江町からの避難民と出会い「町を戻したい」と願う熱い心に動かされたようだ。

「私に何かできることがあればということ、最初は生鮮品を扱うことを考えましたが、物流が確立できなかったから、精肉店を営んでいる強みを活かしてこの食堂にしました」

しかし避難指示解除から1年しかたっていないここで、商売をすることに不安はなかったのだろうか。

「医療関係は非常に心配なところですが、うちのスタッフも、万が一けがをした場合とか、緊急体制は整っているのか。不安材料はいっぱいですがね」

それでも渡辺さんは「誰かが始めな

いと」という一心で店を開いた。「多くの人が戻れる環境にしたい、それしかないです」と話す。

*

松本義道さん(87歳)と良子さん(82歳)夫婦は震災後、避難所を転々とした後、11年9月からいわき市の「高久第9仮設住宅」に住んでいる。部屋は4畳半ほどの居間と同じ大きさの寝室のほかに台所などがある。

この仮設住宅は原発事故後、避難指示区域に指定されていた楢葉町の住民が住む。15年秋に町の避難指示が解除されると、仮設住宅の避難民は「空室」という張り紙とともに減っていった。その後、仮設住宅の提供が打ち切られることが決まった。いまだに残る住民は原則、今年3月末までに退去することを迫られている。

義道さんは「死ぬのはここでなく楢葉がいい」と話す。楢葉町が帰りたい故郷なのには変わりがない。

しかし彼らの楢葉町に残した家の修復が終わっていない。業者には以前から頼んでいたが、町民がこぞって家の修復を頼んだこともあり作業が終わっていない。「避難のときはさっさと出ていけ。今度は早く戻れ。そんなのあんまりだ」。

そんな松本さん夫婦も楢葉町に自動車で定期的に帰っている。「雨戸を開けて風入れねえと、家が壊れていっちゃうべ」。帰る理由はもう一つあった。